

体育・スポーツの類型の史的考察

武藤 幸男

A Historical Study of Physical Education and Sports

by Yukio MUTOH

The aim of this study is to classify the materials of physical education and sports history.

It is possible to classify the materials from all over the world by inquiring about the relationships between the materials, the culture and the style of living in various places.

This classification will give up a clue as to the relationship between physical education, sports and the style of living in the Japan of the future.

概要

本研究は、体育文化史・スポーツ史についての資料類型化を試みたものである。体育・スポーツに関する幅広い資料を各対象地域の文化、生活様式との関わりにおいて考察することによって、地球的規模の類型化が可能となる。この類型化を手掛かりとして、我が国の将来における体育・スポーツと生活様式の関わりを予測し、発展の方向を探ろうとするものである。

はじめに

抽象絵画のジグソウパズルであって、具象絵画の場合のものではなく、そしてかならずしも無限の広がりとか、未知なる世界の解明とも言えないに近い面を持っている。

これらは、体育では、現在模索中ではあるが、史実はあるても、体育学なるものを学問として裏づける哲学的に統一化された的確なものがないために、史実の選択・対象が不一致になる場合が多い様に思われるなかで、体

育を運動文化として捕らえることとして、論を進めてみる。

一方、こうして、地球上の運動文化として捕らえらるとらえ方で、史的、比較的に見てみると、やはり人間生活の延長線上で自然環境と深い関係にあることを第一に上げなければならない、単なる原始時代そして古代ぐらい迄の考察ならばこれで納まってしまうようにも思える。

こうした体育文化、スポーツ文化は、将来多岐にわたるような錯覚を起こさせるのであるが、体育学・保健学・スポーツ科学、諸科学の進歩の人類への貢献が、それぞれの存在を示すようなシステム化が計られた形で結論が出なければならない。

そこで先ず、予測する探索指として、次のような5項目を上げてみた。

1. 健康、生命の保持、機能基盤との結び付きを考えて。
2. 記録の追及のためのもの
3. プロフェッショナルとして
4. 合目的でないもの

5. 余暇活動としての存在。

上記の関連において、派生するものとなるであろうが、いずれも現在のレベルや発想や方法論ではなく、それらを支えているものの中に存在する極一部の構想が、拡大されたものによって、支配されるであろう。これらの理論は、人類史上から、この類の事象のものであれば、このように考察しうと思われる。なぜならばヒトの生活のなかから自然発生的に生れ、やがて時とともに、行動科学や体育心理のうえからも、色々と変化はしたがそれに近い状態で存在しているものもある。また、成り行きに共通するものが多々ある。そして形のうえでは、一部には未開社会的（ここでの未開社会は、時代区分の意味でなく未開発、未発達、未文化をさしている）な存在をするものもあるが多くの場合は、殆ど、ルールで括られるようになり、スポーツとして、また、その他の遊戯やダンスとして現在に至っているのである。

そこで、このようなところから触れていくために、次のような筋立てを考え、それにしたがって肉付けをしていくことによって論旨に迫っていくことにした。

I. 史的考察の進め方

出来るだけ原点からと思い、原始時代の生活即体育といわれる時代、即ち、自給自足（農耕・狩猟・漁撈・その他）の時代を想像力たくましく身体活動を想定し、スポーツ・体育のこれらが原始社会にどのような影響を与えたか、そしてそれらが有史としてのまとまりをもつ古代に形として、絵として、文字としてのこされたものなかから体育・スポーツ・ゲーム・遊戯・保健をひきだしどのような伝承発展があったかを、それぞれ可能な範囲で比較することによって、原始・古代像としての予測を分類・類型化することによって、

論旨の類型化の基盤となるような手法を一つのステップとした。なぜならばそれは生活に密着した運動的要素 (kinetic elements) としての physical movements の原点でもあるからであり、つづいて中世→近世→近代→現代と追っていきたいのであるが、一般歴史学の枠内での時代考証では、ずれが出てくる場合が体育・スポーツでは多い、なぜならばこの領域では、歴史的事象が発生しそのことによってかなりの領域に影響を与えたような場合がかならずしも一般の時代区分と一致しない、しかしここでは注釈を加えながら一般の時代区分を基にして論を進めることにした。

そして、自然環境、統治者、戦争、宗教、機械化等が運動文化伝承の変化要因として上げられると思われるので歴史的流れのなかで特に気を配り、一方、数か国の史の変遷を考察すると同時にスポーツの発生地等、出来るだけ多くを調べることによって類型指にちかずけようとし、尚、健康についての考え方、国際性をはかるためのルールの誕生、発生当時のものの改良により、より楽しく、より巧技を要するようになり、また、従来のをいくつかミックスした形で展開したというスポーツやゲームの誕生という側面からも検討を加えた結果、現代スポーツへの構築をすることによって現代スポーツ・体育・ゲーム・遊戯・ダンス・空中での physical movement・保健等、の理解を一層深めて将来予測へと入っていきたいと考えた。

そして将来予測については、生命現象の追究、健康保持のための、体力保持のための、そして身体活動の及ぼす知的活動への連鎖について述べていきたいと思っている。

このような述べ方をするのは、あくまでも生活や自然社会環境と切り放して考えることはできないという前提であると同時に、予測もこの視点から行なうことが妥当であると思

われる。

II. 現代に至るまでのプロセス

1. 原始社会のkenetic elementsとphysical movement.

原始時代の狩猟、漁撈、農耕それぞれにもなって派生するものは、食料、技術、防衛、等ということになり、これらを支える体力、これらについて意図的に行なわれるようになったのは、もう少々時を必要としたようで、ここではむしろ技術の方が先行したようで、これが自然の成り行きといえよう、なぜなら人間生注の中には、動物と同じような闘争、挑戦、競り合い等がおこなわれていたであろう、しかし人間の理性は、これらを儀礼や祭祀におけるダンスや遊戯におきかえ、これらの発展が、社会構成へとつながると同時に古代へと伝承されていくことになる。

これらのことは、ヨーロッパ、中国、インドにおいても発生年代や手法、変転は異なっても相対的に同じ様な事がいえると思われる。それはのちに発掘された遺物によっても明らかである。

これらの裏づけは時代的には少々ずれていても生活内容が極く似かよっていた事をいみしている。

このような生活のなかで、身近かなものから、広い意味での採植が上げられよう、それがどのように展開されたか、地形的なものとして平野なのか、山地なのか、海なのか川なのか、場所、方法、採取目的の対象となる部分等によって体力や頭脳や身体的器用さまでが問われるし、道具を使用するようになったときは、ますますそれ等が要求される。また、狩猟ともなれば、尚更に体力等を必要とするし、弓矢、ブーメラン的なもの、石投げ等、高度な技を要求されるし、これらを考えると採鉱ということも関係してくるし、採土など

もからんで来る。これらはいずれも生活にかかわる人間の能力や体力に、いやが上にもものしかかるわけで、これに農耕、漁撈等をふくんだ生活が、地球上で展開されていたわけで、そのなかで、さきに述べたように本能的に競うという行為が、現代スポーツの原形を生み出すことになるわけであるが、それぞれの行為を、体育的にもスポーツ的にももっと分析し考察をし想像たくましく、構成を考えるならば、もっともっと色々な方向や内容に触れることができるかもしれないが、けれどもここでは、原始時代のkenetic elementsとしてのphysical movementがチェックでき、生活との関わりでの分類のためのものであるの、この辺で古代にはいるまえに原始時代を括ってみることにする。

- 生活のためのもの
- 技術にかかわるもの
- 体力にかかわるもの
- 祭祀にかかわるもの

として分類指標と比較するとプロフェッショナル的なものも少々芽え始めているようだが、健康・生命にたいしては、呪術的な世界でとどまっている。

また、未開社会（現在も未開である社会を指す）との比較において、現実においては、現代文明がかなり混合しての残存が事実のようである。しかしながら見逃すことのできない文化の伝承を受け継いできた部分があることで、それらは、地球的に見ると、現在行なわれているスポーツの原形とも言える殆どのものが含まれているのである。学術的には、類型として、採集猟民と未開農耕民の二つに分けることができるのであろう。これらの種族によって行なわれている。また、従来行なわれていた種目を上げてみると、それらはいずれも宗教、呪術、生業暦との関わりをもつものが多く、また、現代スポーツと類似し

たものの殆どが行なわれていたことになる。

例えば、短・中・長距離走といえるような距離を決めての競走、高飛び、幅跳び、棒高跳び等、方法や道具に違いはあっても、このように表現できるものや、このほか、球戯、アーチェリー系のもの、レスリング形式のもの、フェンシングや剣道に近いもの、雪上や氷上でのスポーツ、綱引、竹馬、ケン玉、ぶらんこ等をあげることができる。このほかにも舞踊(ダンス)、遊戯等色々あるがこれらをひとまとめにして先史時代(原始時代)から古代にむけての kinetic elements としての physical movement・physical activity は当然のことながら一致するわけで、未開社会における保体的運動要素としての身体活動の想像の域と史実とが、かなり一致した形(但し、水泳については、遺跡のレリーフ・壺等の模様のなかには絵が描かれているのであるが、現代の未開社会には、それらしきものはみい出すことができなかつた。)で後世に伝承されたということと、何度も繰り返すが、スポーツの原形は生活とともに歴史とともに発生し発展し、育まれて現在に至っているという原点を一応固めたこととして次のステップに入っていきたい。

2. 古代社会の体育・スポーツ

ここで言う古代とは、紀元前3000年位からを対象にして、原始社会(未開社会)の時代に発せし、固まってきたとは言うもののスポーツとして、体育活動として、後に確実につながるような活動内容を持ったのと、体育・スポーツのまとまりを持ってきたのが古代といえよう。

例えば、紀元前2700年～2200年頃には組織化された次のようなことが行なわれている。ダンス・ランニング・動物狩り・スイマー・魚突き、棒投げ・アクロバット・レスリングその他、紀元前2100年頃は、戦闘訓練と相ま

ってレスリングが性格を変え、盛んになると同時に内容的には、誰もがでなく一部の人が限られた種目をという傾向と、紀元前1600年～1100年頃は、ますます前述のような傾向が強くなり、特に戦争のための訓練に結び付いた種目、即ち、当時の戦車での狩猟、弓矢の弓射、ランニング・漕艇・木刀試合・現代のホッケーに似た球技が、文化の発展のあったところ少々の内容の変化はあっても同じ様な道を辿ることになる。次に当時の様子を二、三上げてみると

2-1 近東の場合(紀元前4千年頃)

戦闘のための棒・投石機・槍・弓矢が盛んになり、戦車競走・狩猟は、シリア、パレスチナ、アッシリア、イラン、エジプトにその傾向が見られ、水泳についてもアッシリア出土のレリーフに現われている。しかしながらこれらの思想が騎士という形で表わされてきたのは、紀元前千二百年頃とされる壺の絵に、そして騎兵の形としては、紀元前千百年頃とされている。

2-2 古代クレタ島のスポーツ

雄牛跳びなど、祭祀的なものであったが、後の機械体操の原形とも言えるものを生みだし、いづくも同じ、ボクシング・レスリング・狩猟・長距離走が軍事訓練として、一方、祭りとともにダンスが行なわれていた。

2-3 古代ギリシャにおけるスポーツ

○ 古代ミケーネのスポーツ

貴族の狩猟が盛かん

○ ホメイロスのスポーツ

走・跳・円盤投げ・槍投げ・弓術・レスリング・ボクシング・戦車競争・遊戯・ダンス・ボート競走・パンクラチオン等。

ミケーネにしても、ホメーロスにしても貴族社会における騎士としてのアレテー(肉体的美)追求であるにほかならない。

一方アテナイにおけるカロカガティアは、

アレーとともにも名誉心、勇気、節制等の貴族の言うところの美にして善と考えることができるが、まとめて真善美聖（岸野）と置き換えることができよう。

しかしながらここで、時代の進展と同時に現代類似する問題としてカロカガティアの二分化、それは、プロ化が除々に時代とともに進むことによって、アレーは別として、カロカガティアに、少々ひびが入ってくるのである。そして、自ら行なうスポーツやゲームから、観るスポーツへと姿と内容を変えていく時代に結び付いていくが、下層民といわれた人々もただ成り行きを見守るだけでなく、プロレタリアとしてのスポーツを密に行なっていくのであるが、これらが表面に出てくるのは、近代になってからといってもよいのではないか、こうして、ギムナチオンにおける色々な競技、即ち、観る競技が、プロ化したショーマンによって行なわれた。このような時代になると自己の健康に気を配るようになり保健的な考え方が取り入れられるのが、自然の成りゆきかの様に医療体操のようなものに貴族達は頼るようになる。このことによって医療体操はそれなりの発達をとげるのであるが、紀元前7～6世紀には、スポーツ（医学的知識を身につけた体育指導者）が生まれ、栄養、睡眠、マッサージ等の重要性を説くのである。バイトウリベースといわれるトレーナーが生まれたのも同時期で、そこでギムナスティクスは理論担当として存在するのであるが、この両者の区別は実際のところ困難であると言える状態で社会活動をしていたといえる。

種目としては次の様なものが上げられる。直線競走、折り返し中距離、折り返し長距離、五種競技、たいまつ競走、武装競走、レスリング、馬の競技、戦車競走、競馬、ボクシング、投げ槍、円盤投げ、投げ縄、幅跳び、水

泳、球技、現在のホッケーに近いもの、スカッシュ、ラグビー、キャッチボールの様なもの、ダンス、アクロバットという具合に上げられる。

2-3 古代ローマにおけるスポーツ

○ エトルリアのスポーツ

前5～3世紀は、ショースポーツの観戦が主であったが、ギリシャとほとんど種目に於ては変化はみられないが、下層民かプロによって行なわれた。

○ ローマ人のスポーツ

エトルリア、ギリシャと種目的、動機的にも大差のない展開をするのであるが、入浴ということが可成りクローズアップしていることと、保健・医療についての関心が非常に高かったことを遺跡が物語っていることで明らかである。

この様に古代の史実を追求することによってその発生が、前述の様に、狩猟民には弓、槍、ブーメラン、投石、水練の様な種目の芽ばえが、一方、農耕民には、格闘技、ダンス、舟、走、跳、球技など重複するところはあったとしても、生活との結びつきがあり、大陸には大陸の伝播の仕方が、島国は島国なりの地域によって、それぞれの発生伝播を繰り返して現代へと近づいて来たわけであるが、上記の様な理由でなく、その様相を変えることの出来ない外圧による変化を見る時代への突入とも言える中世は、一応さけることにした。それは宗教的影響による肉体軽視の風潮が大きくあらわれ、日本に於ても、普墮落、不定などといった様な極く僅かな人々ではあったが、事実として記録にのこされているのであって、これらも一種の肉体・身体軽視とみることが出来よう。かかる時代背景での人々の運動文化への感心は、むしろ統制されていたと考えられる。そこでこの領域は触れず次の本論へと進めて行きたい。

3. 近代社会のスポーツ

近代社会のスポーツ・体育は、ブルジョアジーの理論によって演出されたといっても過言でなく、体育的な時代区分からすれば、産業革命によって生まれた上記の様な特質を持っているので19世紀を近代の幕あけとしてもよい様に思われる。類型化と言う立場からすればこれらも一つのパターンかもしれない。

そしてその内容を大局的に見てみると、近代合理主義とは数量的合理主義と同義語的で、この様な思想が、伝統的民族スポーツの再編といくつかのものを併合することによって、平しい種目、方法、競技を考察したりして、出来るだけ、土俗的、土着的、祭祀時のものは排除し、より、産業化をはかるため、規格化された人間の育成、より集団の秩序を高めるための手段となる様な種目の実施を先行させたのである。しかしながらプロレタリア階級の人々は、ブルジョアの論理と実践を越えた。その現象は第一次大戦後に顕著に現われた。

ここで少々近代スポーツを分析してみると、スポーツのほとんどがイギリスによるものが多いが、中には、アメリカでのバスケットボールやバレーボール、テニスマークのハンドボールの様なものもある。

これらの原象と行為は、主に学生が中心になり、それらを各地域へ、伝播の役割をはたしたのは宣教師や留学生によるものが多かった。

こうなると必然的にルールの統一化と組織化ということになり、local rule → national rule → international rule へと発展していったわけであるが、こうして競技としての形を整えていく一方、産業革命のもたらした技術革新がその内容を更に変えていくのである。その中で最も大きな影響を与えたのは、合成

ゴムとその工夫がボールを生む、従来のこわれやすい、はずみの悪いものから、耐久性のあるやわらかいボールは色々な素材となって、ゲームやスポーツの発展や記録の向上を生み出す結果となる。産業がスポーツを変えようというよい例として上げられよう。

こうなると、人間の力で自然発生的で、必然的な動向として、この結果、勝利のみの追求記録中心の考え方が優先するスポーツへの考え方が先行する。

この様な現象はスポーツやゲームが発生と同時に人間とのからみあいからすれば、歴史は古くなるが、現代は、これらを受けて、流れとしては、又新傾向的な動きと思想の匂いをうかがわせている実情と言えるのではなからうか。

近代におけるスポーツの商業化、情報化は現代スポーツを支える役割りをはたしているといえよう。ここでいう商業化は、スポーツに付随する道具、器機、衣服等であって現代のものとは少々意味を異にする。

一方近代に入って女性のスポーツへの参加は極端に多く広がりを見せていることも見逃がすことの出来ないことではなからうか。それらの理由も本論である将来のスポーツ・体育の類型について考察するときに重要なポイントであり事象であると言えよう。

さて、かかる史的考察もいよいよ現代へと入っていくことになる。

だが、ここで現代社会のスポーツに入る前に本論の側面的補強として、スポーツの発生地についてと各国のスポーツ事情を史的に眺めて現代体育・スポーツそして将来を予測するために、スポーツ用語辞典(1987年)より取り扱われているスポーツ全部を洗ってみたのと、スポーツ大事典(1987)の各国のスポーツを全部あたって大枠でまとめてみた。これらの作業は、産業革命的影響力を持つもの

が当初の予想の様にあるものかどうかを探ってみたかった。

4. 世界のスポーツの発生地・国

近代社会のスポーツ・体育のところで、種目のほとんどがイギリスでと・・・2, 3の国と例をあげてみたが、実際は73種目中、イギリス13種目が上げられるが、アメリカの9は新傾向のスポーツで他のものは以外にもバラつきがあり、地域性が強く出されているのが特色となってあらわれている。そして19世紀20世紀を中心に成立され国際化されているのも一つの特色といえよう。これぞプロレタリアの台頭を意味するものが大きいと言える。これらは、類型として、地域・環境・社会状況としての（農耕民、放牧民、漁撈民、狩猟民に対する気候、風土、宗教、思想、戦争、国威）絡み合いによって生まれてくることを示唆する結果となっていると言えよう。

そこで、次に各国のスポーツの様相をたどってみることとした。

4-1. ソビエトのスポーツ

産業革命をはさんでそれまでのものは、一般庶民は抑圧と搾取の中でヒロイズムや勇気の表現としてのボクシングやレスリングを行なった。その他、生活の匂いのするスポーツやゲームが行なわれていたようだ。

一方、貴族達は、海に対しては閉ざされた国とも言える自然環境の渴望は船に関するものと戦闘にそなえての種目が行なわれた。

そして、大局的には、1917年の革命以降のスポーツと別けられるが、1937年制定のゲー・テー・オーとスポーツ級別の制度が現代迄のスポーツを支えてきたと言えよう。そして現在、体育コレクティブおよびスポーツクラブ強化、労働者、大衆の組織的参加の促進、中・高齢層のスポーツの組織化、生産体操の奨励、スポーツ基地、ツーリズム基地、釣

りの家などをシステム化する動きが、1960年以降から顕著になり現在にいたる。故に思想支配型とでも言える現状といえよう。

4-2. アジアのスポーツ

範囲が広く変化に富む地域は、スポーツ行為の特色が非常によく出ている。

農耕中心生活者 → 舟に関するもの、凧あげ、綱引き等があげられ

遊牧中心生活者 → 狩猟、競馬、弓、相撲等があげられ

寒気の強い地方 → 狩猟、ボールゲーム、といった風で、これらは、いずれも、祭や信仰に関係する形で生まれている。

スペースの関係で、アジア各国別には触れないで次へと論を進める。

4-3. アメリカのスポーツ

歴史的には浅いのであるが（独立後）国威型でスポーツを生み出している。特にフィールドスポーツが多い。歴史的には、イギリスからの持ち込みスポーツが含まれているものやはり近代的、現代的なリーダー的存在をアメリカ合衆国は持っているのと、特に大学スポーツの現状には特異性を持っていることが上げられるであろう。又現代的にフィットネス企業や、健康スポーツ産業については、他の国々を可成りリードしていることをつけくわえておきたい。

4-4. オセアニアのスポーツ

イギリスからの持ち込みスポーツが殆んどではあるが、オーストラリアは、クリケットで、ニュージーランドはヨットやラグビーで母国であるイギリスに勝った事は、以後のスポーツの隆盛とその存在が大変重要視されると同時に、観るスポーツというよりも、自から参加するスポーツで、現在のところ窮極では、オリンピックで一つでも多く勝つ事を目的とした可成り合理的な組織の上にチーム作りやトレーニングが行なわれている。

これらの原象は、地域性、自然環境を生かしたものに強さをみせている。又、ニュージーランドラグビー・オーストラリアフットボールを生みだし、そのはげしさは、現代では観るスポーツの傾向が進んでいる現場である。

4-5. フランスのスポーツ

18世紀をはさんで語ることの出来る国である様に思われる。宗教思想の影響を受けて、19世紀になって le sport として多種の大陸特有の交流伝播的にスポーツが展開される様になったのである。

こうした中に、やはり貴族的伝統のスポーツも含まれているという当然の人間臭さがあるヨーロッパの国と言えよう。

4-6. ドイツのスポーツ

ツルネン（走・跳・投）が、スポーツという様になったのは、19世紀からで、ボールゲームは1894年まではあまり行なわれなかった。

スポーツの発展は、ブルジョアがイギリスの貴族のまねをしたのがはじまりとも言え、地球的にもボートレースが早くから行なわれた。

一般庶民は、健康保持を基盤に考えた動きとしてのスポーツや運動を考えた。

しかしこれらも暗い過去として残るナチズムの影響を受けたスポーツは、国家的動きとしてむしろ隆盛を極め、組織化と振興が行なわれたが、それは個人のものではなく国家第一主義とでも言える様な状態である。

4-7. 東欧のスポーツ

宗教的な考えから、肉体的な面は軽ろんじられた時代が長かったが、1945年以降はソビエトの影響を受けた。

スポーツとしては、19世紀以降が上げられハンガリー体操を生みだした。これらは、自然環境がもたらしたものと言えよう。

女子のスポーツへの参加の早かったユーゴスラビアは、混合民族であったことが災いし

て融合、支配、分裂が繰り返されるだけで混合民族の悪い面が多く出た様に思われる。

4-8. イタリアのスポーツ

イタリアのスポーツは古代に花が咲いてしまい1870年以降、国家主義的ではあっても体育的な活動、スポーツが盛んとなってくる。平和体育の裏に何かスッキリしない流れが現代もある。

4-9. スペインのスポーツ・体育

スペインは、古くはギリシャ、ローマ植民地として、次いでゲルマン人やイスラム教徒の支配を経て、1479年に、カトリック王国として成立した。やがて16世紀には植民地帝国となるが、そのころ剣術師範・宮廷乗馬学校スペイン舞踊が生まれ、ペロタ(球技の一種)闘牛等があった。そして1800年にはペスタロッチ方式の体操研究所が、そして19世紀と20世紀の間に、ドイツ体操、スウェーデン体操をとり入れている大陸交流型と言えるタイプである。

4-10. イギリスのスポーツ

イギリスのスポーツを探るには、全ヨーロッパ史的視角を必要とするといわれる様に混合民族であると同時に、我が国に似て、地誌的には陸続きであったこと、そして島国、地型としてもせまいながら、変化に富んだ自然環境を配していることは、スポーツの発生の多彩さの可能性をも持っている国と言えよう。

中世は、騎士的運動文化ともいえるような展開がなされ、又、封建時代の運動文化は戦闘文化であった。いずれにせよ中世はスポーツにとっては暗黒期であって、貴族の気晴しスポーツ(狩猟)が主で、庶民としては、フットボール、鉄輪投げで、パトロンスポーツとして闘鶏、競馬が上げられるが、18世紀になって、やっと色々なスポーツが行なわれる様になった。

4-11. 中華人民共和国のスポーツ・体育

イギリスの小規模自然環境でなく、今迄色々な国々を大まかにながめてきたが、自然も思想も戦闘も、保健的な考えも、今回の論を進めて行く上で、その典型的な一国としてのモデルとしてとらえることが出来るのではなからうかと思われる。未解明な点や研究不足な点は多々あるが、これからの研究の題材や資料は、そして古代にさかのぼるには、ことかかない状態にある様に聴く。ようするに、これからの国という感が非常に強い。国際交流の仕方によっては、単時間に地球に君臨する科学・体育王国となりうるのではなからうか。

以上、色々な国々についても、スポーツを軸にした眺め方で、当たって来たが、一部の国ではすでに現代スポーツに触れたが、ここでいままでのものを当初の論述の順として類型化して、現代の体育・スポーツを大局的に攷かみ、将来の類型の予測へと進めていきたい。

5. 現代の体育・スポーツ

当初の探索指そのものを課題として存在しているもので、それぞれの項目にそれぞれが問題を大きく含んでその問題解決をはかろうと一部の研究者、実践者が取り組んでいるという現場の中で、前述の史的なもの、国々のスポーツについて、大きくはぶいてきた部分があるが、それ等と同じ様に、ここではぶくことによって将来の予測をする方法を取れば、この割愛こそが、現代体育の問題解決であり、将来のスポーツ・体育の位置づけにつながって行くものと考えられる。この考え方の根幹になったものは。

アメリカのフィットネス運動

西ドイツのゴールデンプラン

日本の体力づくり運動

中国の業余体育

イギリスのウォルフェンデンレポート

ソ連のゲー・テー・オー運動

スウェーデンのトリム運動

であって、これらから派生する。そして派生した問題点をそれぞれが、それぞれの類型をさしているのであるといえよう。

結論

さて、ここまでの考察によって得られた体育・スポーツの類型の中で、生活に結びついたもの、国家思想に結びついたもの、宗教思想の影響を受けたもの、戦争の影響(人為的)を受けたもの、自然環境の影響を受けたもの、等の結果、格技、球技、遊戯、水上、陸上の中に包含されるといえる。一方類型のとらえ方によっては、スウェーデン体操・ドイツ体育・イギリスのスポーツ・フランスのアモロス方式・スイスのクリアス方式など簡明な分類を行っているものもある(稲垣)。

次に将来に向かっての論を進めていきたい。とはいっても将来的類型については、我が国にしぼって論ずることにした。

我が国の将来は、経済大国の中の平和体育推進を前提として考えねばなるまい。

先づは、流行型の長続きしないパターン。リバイバイバル型も少数化につながり同じ運命にあらう。しかし、これらは過去と同じ様に、やがて重要視される時が必ず台頭してくる。ただし自然発生的な発生をしたスポーツに限られる。なぜならば次の様な類型が進行するものと考えからである。

① 人間のサイボーグ化型(ロボット化、モルモット化) → スポーツ選手

これらは、種目のための能力のみの伸長を考え、バイオメカニクスとメディカルメカニクスが直結した型で

そして、スポーツ強国を夢みることはある程度の達成は、やがて廃退を招き、プロ化することにより、自動的な立場か

ら観る立場へ、そして観客の熱狂へと同時に商業ベースで考えられた内容より利益に結びつく方向への転換、これらは次の型にも影響されるのである。

② 一般生活者の運動の科学化型

これは数量化につながり、栄養・運動・睡眠と決定的でない状態（生命現象の解明、生活と身体保持の未解明のまま）で、あたかも科学的に裏付けされたかのごとく機械的に、キーボードと直結した様な生活の中の事象として進行するがごとく行なわれるであろう。

③ 運動医学と保健の分野の独立発展型

従来は、体育の範囲でことたりていたし異分野の学問系体にいた者が簡単に体育の分野に入ってこれたが、養成機関から専門性を持たせての（現在の養成機関で大きく欠落しているのは医学分野、他にもあるが）指導者養成による専門家の輩出。

④ 上記3点を実現するための国際化型

この様な予測（西暦2000年頃をメドとして）が従来の史実、そして現代体育の分析によって成り立ってくると筆者は考え

るのである。

しかしながら、これらは、あくまでも部分的というか都市型の体育・スポーツを指すのであって、学校体育、社会体育の領域を無視するものではない。（1987.9.17記）

（文教大学情報学部講師）

文 献

- 1) 岸野雄三監修, スポーツ大事典, 大修館書店, 1987
- 2) 今村嘉雄監修, 新修体育大事典, 不味堂, 1976
- 3) 加藤橋夫訳, 新版体育の世界史, ベースボールマガジン社, 1976
- 4) 邵文良, 中国古代のスポーツ, ベースボールマガジン社, 1985
- 5) 岸野雄三監修, 古代スポーツとゲーム, ベースボールマガジン社, 1986
- 6) 直良信夫, 古代日本の漁獵生活, あしかび書房, 1948
- 7) 菱川從尹他, 21世紀の健康学, 大修館書店, 1985
- 8) 岸野雄三, 近代スポーツ年表, 大修館書店, 1973
- 9) 大石三四郎監修, スポーツ用語辞典, 成美堂出版, 1979